

『後拾遺集』 女流歌人増大の意味するもの

実川 恵子

はじめに

『後拾遺集』が、和泉式部を筆頭に、相模、赤染衛門、伊勢大輔、小弁らの女流歌人の詠歌の多くを入集させていることは、周知のことであり、この事実は、明らかに女流歌人への評価を語るものであろうし、また、勅撰和歌史上での注目すべき特質ともいふべきであろう。

集の巻頭に小大君の詠歌を置いたり、「雑」部の巻頭や巻軸歌に道綱母、斎宮女御歌を配する点や、一卷の増加を見る「雑」部に圧倒的に多数の女性歌を採択したり、また、一首入集歌人に女性が多いことなど、それらから本集の編纂意図の何らかをくみ取ることができようかと思える。

この女性歌増大と歌風の問題について、「これらの女流歌人詠の本質は、主情的な生活詠にみられるような、褻的な世界を表現するにとどまり、『後拾遺集』の歌風形成に關しては、これらの女流歌人詠が互いに個性を相殺して、その特色をなしうるところまでゆかない」という見方が、女流歌人の文学的評価となされている。

しかし、平安和歌史上の屈折点として論ぜられることの多い『後拾遺集』に、こうした女流歌人詠の増大が何らかの意味を持つものであろうし、また、中世和歌の萌芽を見ようとする見解とも、ある意味で絡んでくる部分もあるようにも思える。こうした点を問題にしながら、二、三の視点から増大の意味を考察したいと思う。

『後拾遺集』の入集歌人の類別²からも明瞭な如く、女性歌人数は、前勅撰集のその比率と比較しても、群を抜いている。この現象は、『後拾遺集』の入集歌人の特性に掲げられるのだが、これらの女性歌人達は、『後拾遺集』にどのような文学的役割を荷ったのか、また撰者通俊が女性歌の増大をどのように受けとめていたのか、歌人評定の規準についてどう考えたのかなどについて疑問を投げかける点も多い。その始発点として、最多入集歌人の和泉式部歌をめぐる問題、「恋」¹「雑」における女性歌と詠み人知らずについて、考察してみたいと思う。

最多入集歌人の和泉式部は、六七首を入集する。その巻別分布の状況は、春上下十、夏一、秋上下五、冬二、羈旅一、哀傷五、恋一―四三、雑「一―六」二三首となっており、人事的要素の濃い恋、雑巻に集中していることが判かる。この『後拾遺集』の和泉式部歌入集の意義をどこに見い出すが歌風の問題とも考えあわせると大きな課題であらうし、また改めてその文学性を問い直されねばならないだろう。そこで、本集入集の和泉歌について検討してみることとする。

六七首の和泉式部歌のうち、二三首が「題しらず」歌として入集しており、そのうちの二十首が「百首歌」から収録している。

四季歌に配置された和泉式部歌は、そのほとんどが「題しらず」歌で、意表を衝くような新奇な用語を駆使し、和泉独特な世界を形成し

てゆく。「春霞につやおそきと山川の岩間をくぐる音聞ゆなり」(春上・13)の歌や、桜の歌の最後に位置する、「庭に桜のおほく散りて侍りければよめる」と詞書された、「風だにも吹きはらはずば庭桜散るとも春のほどもは見てまし」という落花を愛惜した歌など、式部ならではの非常に異彩を放った詠風である。

また、「岩つつし折りもてぞ見るせこが着しけれなる染めの色に似たれば」のような、妖艶な、絵画的世界を描写したような詠歌も見られる。夏巻頭165の「四月ついたちの日よめる」と詞書して、「桜色に染めし衣をぬぎかへて山ほととぎすけふよりぞ待つ」という和泉歌は、初夏の景物(更衣、山ほととぎす)を一首中にそつなく詠み込み、夏の巻頭を飾るにふさわしい詠風である。

317ありとてまたのむべきかは世の中をしらするものは朝がほの花(秋上)

のような、世のはかなさを諦観した独特な観念の世界を表現するような歌、そして秋上の巻尾に位置するのが、次の歌、

山里にあからさまにまかりて侍りけるに、物おもふころにて侍りければ

334なにしかは人もきてみむいとどしく物おもひまさる秋の山ざとに感じられる和泉の情念の強さ、あるいは「業」というようなものを見せつけられる歌である。また一方では、「さびしさに烟をだにもたたじとや柴をりくぶる冬の山ざと」(冬390)や、「こりつめてまきの炭やくけをぬるみ大原山の雪のむらぎえ」(冬414)のような、やわらかな抒情的な歌も見られる。

以上の、六七首のうち十七首(およそ二五パーセント)が四季歌である。これに続く「賀」、「別」巻には、和泉歌は入集せず、巻九「羈旅」509に、詞書に「和泉にくだり侍りけるに、よる都鳥のほのかに鳴きければよみ侍りける」とある「こととはばありのまにまに都鳥みやこのことを我にきかせよ」の在原業平歌「名にし負はばいざこととは

む都鳥わが思う人はありやなしなと」(『古今集』「羈旅」、『伊勢物語』第九段)を本歌とした歌がある。

和泉式部の「哀傷」歌は次の五首(539 568 573 574 575)である。

山里にこもりて侍りけるに、人をとかくするが見え侍りければよめる

539 立ちのぼる煙につけて思ふかないつまたわれを人のかく見ん

小式部内侍なくなりて、むまごどもの侍りけるをみて、よみ侍りける

568 とどめおきて誰をあはれと思うらん子はまさるらん子はまさりけり

敦道親王におくれてよみ侍りける

573 今はただよそのことと思ひ出てわするばかりのうきこともがな

おなじ比、尼にならむと思ひてよみ侍りける

574 捨ててはてむと思ふさへこそかなしけれ君に馴れにし我身とおもへば

十二月のつごもりの夜よみ侍りける

575 なき人のくる夜ときけど君もなしわが住む宿やたまなきの里

573 574 575 は、師宮挽歌といわれる歌、568 は、小式部の死をいたんだ哀

傷歌中でも、傑作中の傑作といわれる歌である。これらの哀悼歌は、空虚な「悲しみ」が、和泉の心情を貫ぬいて、昂揚し、それが結実した迫力ある表現の歌になっている。

恋歌は、二一首入集する。和泉の代表的な作として著名な、「黒髪のみだれもしらさうちふせばまづかきやりし人ぞ恋しき」(恋三75)、「あらざらんこの世のほかの思ひでにいまひとたびのあふこともがな」(763)、「白露も夢もこの世もまぼろしもたとへていはばひさしかりけり」(恋四、恋部巻末832)などを置く。恋歌には、代作歌の「おぼめくな誰ともなくてよひよひに夢に見えけん我ぞその人」(恋一611)や、修辭的技法を駆使した遊戯的な一面の見られる歌である。「おきながらあかしつるかなともねせぬ鴨のうは毛の霜ならなくに」(恋二681)、「津の国のこやとも人をいふべきにひまこそなけれあしのかやへぶき」

(恋二691) などがある。

雑部(一―六卷)には、二三首の入集であるから、恋歌とほぼ同数ということになる。雑巻は、『後拾遺集』で一巻増えており、その詠歌内容も、四季歌とは異なつて、人間と人間の、あるいは人間と社会の關係における生活の底辺から生まれるもの、また、そのような人間の精神史を詠うため、雑部に比較的に生活的色彩の濃い歌を集められており、それだけにその時代の風潮をより反映していることになる。

ところで、そのような雑部の式部歌は、どんな歌なのであろうか。

人間の底流にある「あはれ」の思想を採集した「雑一」には、式部歌は入集しない。最初の雑歌(雑二910)は、詞書に「男の夜ふけてまできて侍りけるに、ねたりと聞きて帰りにければ、つとめて、かくなんありしと男のいひおこせて侍りける返事に」と詠歌事情を記した、ふしにけりさしもおもはで笛竹のおとをぞせまし夜ふけたりとも
の詠、掛詞、縁語を使つての恋歌的な雑歌である。続いて、911も、「宵のほどまうできたりける男の、とく帰りにければ」と詞書する、やすらはでたつにたてうき槇の戸をさしもおもはぬ人もありけり
(雑二)

このどちらも、恋に分類しても良さそうな歌(913・920・925・926・927・928・951・964・965)だが、一種独特な「をかしみ」が感じられる雑歌が多数採択される。「雑三」「雑四」「雑五」に入集する歌は、女の肉体的な性を詠つた歌など、自己を客体化した、和泉式部特有な、女歌に見られる伝統的感性からかけ離れた世界を歌っている。神祇歌として入集する「物おもへば澤のはたるも我身よりあくがれいづるたまたとぞ見る」(1164)は、恋を失つた憂悶の身を貴船明神の前に運び、鎮魂の祈願を込めたこの歌と、そして、貴船明神が男の声で応じたのを式部の耳にとどいたという返歌を付して載せる。また、誹諧歌の三首は、和泉の緊迫した心情(1206)や、信仰の投影を、文芸的な要素に昇華させた歌(1212・1213)を入集する。

和泉の雑歌には、精神的な昂揚が、ことばに託された表現を通して、文学性の極限に及び、観念的で生々しい世界へと導く誘引力を持つているように思える。

このように、女流歌人の筆頭に揚げられる和泉式部歌について、その文学性を考察してみた、その結果、次の三点が、式部歌について言えるのではなからうか。

まず、『後拾遺集』の撰者は、和泉式部歌を非常に注目し、意図的に入集させたこと、そのうえ、彼女の歌を、巻頭、巻尾、あるいは主題別に排列する冒頭や、終りに配して、『後拾遺集』の文学性がある方向で高めようとしたことなど、また、和泉歌の三分の一を占める歌が、「題しらず」歌として入集する点である。これは、式部歌が詞書に依存することのない優れた歌で、単独で文学性を主張することが可能であつたためであるという見方もできる『後拾遺集』の歌風形成上、和泉式部歌の多数の入集の背景には歌本来の持つ抒情性を問い直す過渡的な和歌表現の模索、そして、『後拾遺集』にある新風を送り込もうと企てた撰者通俊の大いなる主張であつたとも看取されるのではないだろうか。

和泉式部歌に限つて、その増大の意味を雑駁ながら触れてみた。

後拾遺撰者は、環境的には恵まれてはいたが、単なる受領階層の女房としての和泉式部に、多大な待遇と評価を与えたことになり、その上に『後拾遺集』で、多くの女流歌人に対して目が開かれたこともあわせて、勅撰史上意味深いものがあろう。

二

三代集の入集歌人状況と大きく相違する点の一つに、前述した女性歌増大とあわせて、詠み人知らずの減少が揭示される。

三代集のそれらに較べて、六十首(全歌数の五、五パーセント)という極端な数の減少は、歌の本文や成立状況をできうる限り、把握するという、意欲的な撰集意図を窺うことができる。

また、同時にその六十首を数える詠み人知らず歌で詞書内容、詠歌内容から明らかに女性歌と見なされるものは、その六三パーセントに価する三八首にのぼる。そこで、この詠み人知らず歌群に投じられた女性歌について、二、三私見を述べてみたいと思う。

三八首を順にその歌番号で示すと、21 26 44 398 499 555 602 603 616 634 650 687 689 693 694 697 699 704 708 724 732 734 737 739 865 878 883 906 917 929 1007 1028 1079 1082 1122 1175 1189 である。このうち、『後拾遺集』の諸伝本に付された勅物から、七首（26 44 398 499 694 906 929）に女性の実作者名を記しており、いずれも、身分的に、「下賤・卑陋之輩」の者であるが由に、こうした無名歌として扱われたことは推察できる。

では、この三八首を内容の面から検討してみることしよう。それらの歌の各巻における分布状況は、春3、冬1、別1、恋一3、恋二8、恋三5、恋四1、雑一3、雑二3、雑三2、雑四2、雑五2、雑六1となっており、詠嘆性の強い雑部にその比率の高いことが明確である。

そのうち、「恋」に分布する女性の詠み人知らず歌は、その詞書に示される詠歌事情等から、整理すると、次の三種類に分けられる。

女性の詠み人知らず歌として、当然予想されるのは、贈答歌の返歌の場合で、三例（634 650 724）と数値的には低い。

634は、道命法師からの忍ぶ恋の贈歌（633）に対して、軽くないなした返歌、650、724は、能宣朝臣からの贈歌に対しての、女の返歌である。この723の詞書、724の上句に異同が見られ（『能宣集』私家集大成第一巻117・57）、原資料が問題になっている。

次に、詞書中に相手の男性名を記した歌の六例である。順に歌番号と、その男性名を掲げると、

左大将朝光687、大式高遠689、道濟697、輔親704、（恋二）、清家732、

源頼綱朝臣734（恋三）

である。

これらのいずれもの歌には、その詠歌事情が詳細に述べられており、この女性の詠み人知らず歌は、詞書に登場してくる男性に付随しての入集と考えられる。そのうえ、朝光、高遠、道濟、輔親、清家、頼綱らは、みな当時の歌界での和歌の堪能者で、注目される人物ばかりで、彼らとの関連において、この女性の詠み人知らず歌が採択されたものと考えることができよう。

また、恋三の732、734は、相手に次のようなまいったく同様な詠歌事情を記している。

清家が、父の供にあはの国にくだりて侍りける時、かの国の女に物いひわたり侍りけり、父、津の国になり、うつりて、まかりのぼりにければ、女、たよりにつけてつかはしける

732心をば生田の森にかくれども恋しきにこそ死ぬべかりつれ

源頼綱朝臣、父のともに、美濃の国にくだり侍りける時、かの国の女にあひて、又おともし侍らざりければ女のよめる

734あさましや見しは夢かとおふほどにおどろかずにもなりぬべきかな
この両歌とも、詠歌内容は、満されない恋の嘆きを訴える歌だが、二首つづけて排列せず、間に律師慶意の「たのめたるわらはの、久しく見え侍らざりければよみ侍りける」と詞書された、

たのめしを待つに日数の過ぎぬれば玉の緒よわみたえぬできかなを置く。どうしてこのような配列法をとったのかは疑問だが、こうした恋「部」に登場する女性の「詠み人知らず」歌は、男性の歌に従属して伝えられた『後撰集』に多く見られる贈答歌的な要素から逸脱しており、詞書が、詳細に詠歌事情を叙述し、その歌も、修辭的な技巧を重ね、切なる恋心をもごとに表現する単独歌が多くを占める。このような、歌を詠出した女性歌人等は、どのような人物であったか。732の詞書に記された清家の父、範永は和歌六人党の一員として活躍しており、その関係での女性歌人の一人であったか、又、734歌も、多田歌人と号し、和歌の堪能者でもある頼綱の周辺に位置する女性であった

かも知れない。

以上のように「恋部」に投じられた女性の詠み人知らず歌は、前勅撰集に多く見られる男女間の贈答歌の一方という、男性の贈歌に随伴して生まれた歌ではなく、歌自体が、何らかの事情や、対人関係をにおわせた、ある一つの規制する意図を持つていることが、本集のその一つの顕著な特性であるといえるのではなからうか。

次に、雑部の女性歌⁶⁾について考察してみたい。雑(一―六)六巻の女性歌を、記名歌人と女性の詠み人知らず歌に分けてその数値を示すと、次の表の如くなる。

		雑一	雑二	雑三	雑四	雑五	雑六
女	性	31	43	24	18	21	3
よみ人しらず		3	3	2	3	2	2
							11
							7
							3

この表からも明らかなように、雑部に、女性歌と詠み人知らず歌の分布比率が高い現象は、何を意味するのだろうか。雑部の中でも特に「雑二」にその現象(全歌数六八首中三十六首(五三パーセント)が女性歌)が顕れるのは、その主題である男女間がかれがれになった嘆きや、恋の恨みの歌を集めた特殊な色調を有する巻であり、おのずと詠嘆性の濃い歌を採択することになった事実と符号する。

順に雑部の女性歌の内容を考えると、「雑一」に入集する女性歌は、雑歌的範疇とも恋歌的範疇とも明確に判別しにくいもの(860や863など)や、浄土思想をおわすような869(雑一、中原長国妻歌、哀傷的な色調を有した歌(889周防内侍、890小大君、895道綱母等)、などである。「雑二」は、前述の如き男女間の、恋の恨み、「雑三」は、司召に関する歌など、かなりその内容も広範囲に渡っている。

このように、雑部の女性歌は、人間心理の震幅や変化の相貌を最も

如実に表現した巻であり、そこに採択した女性歌人の撰定にも撰者は、名も無き女性の歌(1007)や、遊女宮木の釈教歌(券末1199、雑六)に見られるような、勅撰集という規範にとられない、歌への純粹な評価を試みた姿勢ととらえて良い。こうした面では、『後拾遺集』の女流歌人を、意図的に部立に配列させた意義をくみとることができるのではなからうか。

三

以上のように『後拾遺集』の女流歌人増大の現象を、和泉式部の詠歌の周辺からと、女流の詠み人知らず歌を中心に検討してみた。

『拾遺集』前後に、散文文学の最盛をむかえたことと無関係ではなしに、和歌史のうえにも転換の様相が顕われるのである。こうした時代背景に、平安朝の女性達が、宮仕えという公的な場を持ち、きわめて主情的な生活基盤の中で生きる情感的、内省的な生活の実践者であったことは、『後拾遺集』に入集する多くの女流歌人にとって不可欠な要因ではない。そうなると、生活の様式や、受領階級の子女達である女流歌人という身分的な問題ではなく、生活意識の根底が、感情に根ざすのか、あるいは理知に基づいてくるのか問題となってくるのであろう。

それが、『後拾遺集』の多くの女性歌に、語られており、情感豊かな、繊細な技法を用いた歌や、小弁に代表されるような一種独特なおもしろさを持ち、その発想や表現、用語に新鋭な閃きを感じさせる機智的な歌なども見られるのである。

情感的な女歌特有な詠歌は、後の『千載集』に述べられる詩本来の有する抒情性を主とする編纂方針につながってゆく一つの新しい試みととらえてよさそうであり、機智的な女性歌は、自己と詠歌対象を隔絶した所に、和歌の新しい志向性が見られる。平安和歌の屈折点を、新しい和歌のあり方を誘引していった和歌六人党の活躍などもあわせて、こうした女性歌は模索する勅撰集にふさわしく、ある文学性を

註

意味しているとも受け取れるのである。和歌史の流れの中から見ると、歌がしだいに技巧的な要素が強くなって、類型的で平板なものが生み出されつつある歌界に、このような人間の本質的な抒情詩として和歌のあり方に帰着すべきだという反省が起きてくるものである。

なぜ『後拾遺集』は女流歌人の詠歌を多く撰入したのかという疑問と、雑歌に女流歌人詠が多いという現象にも、何らかの意図するものがあるのではないか。歌本来の持つ本質をもう一度、見直そうとしたこと、つまり詩本来の抒情の姿を確認しようとしたことは、古代和歌の衰退という過渡期に当って心ならずも試みた撰者の意図とみることができるとはなからうか。そしてここに人間の個としての意識が形成される中世和歌への萌芽が始まったのだと考えてもよさそうである。

- (1) 藤本一恵氏『後拾遺和歌集全訳注』（講談社学術文庫）「解説」の「後拾遺集」の内容と歌風」項。
- (2) 記名作者三二二のうち、男性一七三、僧侶四七、女性九九、詠み人知らず六十に類別できる。
- (3) 拙稿「後拾遺集」題しらず歌」の二、三の問題」（『文芸論叢』第十七号、昭和五八年三月）
- (4) 拙稿「後拾遺和歌集」「詠み人知らず」歌考」（『平安朝文学研究』第三卷第一号、昭和四六年八月）
- (5) 拙稿「後拾遺集」の雑歌をめぐって」（『立正女子大学短期大学部研究紀要』第十九集、一九七五年十二月）